

# 水難の歴史を今に伝える 浅原の避水台

浅原村ハ古ヨリ水害多シ 寛政三年今ノ地ニ移居ス  
河辺ノ孤村ナル故 洪水ヲ避ケシメン為メニ  
享和二年春 勘定奉行小笠原和泉守之レヲ築カシム (甲斐国志)



県道南アルプス甲斐線の若草ランプ南交差点。釜無川の堤防の上に避水台の祠（ほこら）を見つけることができる。



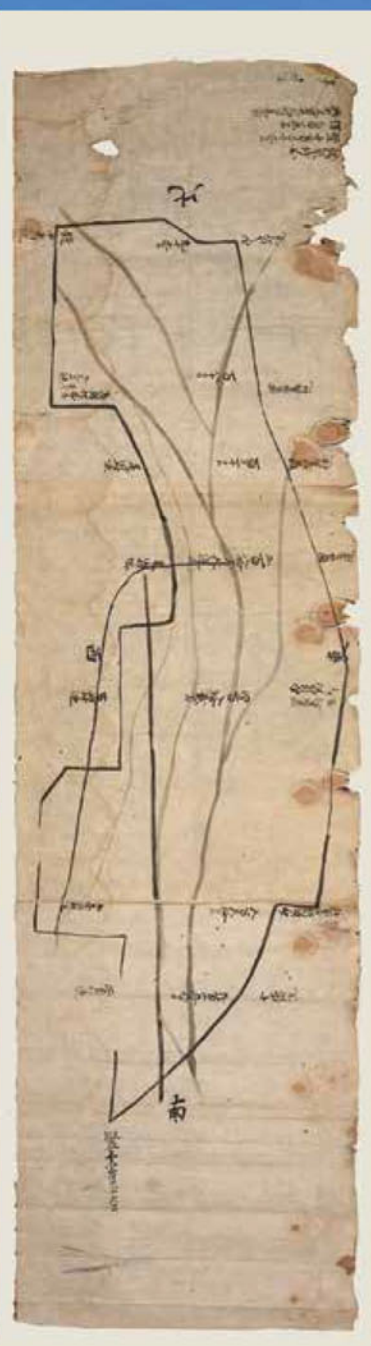
避水台付近を空から眺めると、今でもそこだけ堤防が広く造られているのがわかる。避水台は、浅原地区の北端にあり、そこから北に延びる堤防は、釜無川治水の要「将監堤（しょうげんてい）」。



明治40年(1907)の水害の様子。避水台北側の将監堤が流失し、周囲は釜無川が運んだ砂礫に埋め尽くされている。一方避水台部分は、なんとか流失を免れた。堤防上のひとときわ大きな木が一本杉か。



令和元年8月25日、朝6時。今年も、本格的台風シーズンを前に藤田地区・浅原地区合同で、地域の安全が祈願された。



浅原村絵図 寛文2年(1662)  
村の中を河川が縦横に流れ下り、浅原村の領域が、まさに河原の中にあつたことが分かります。(南アルプス市蔵)



避水台の位置

市内を釜無川に沿って走る県道南アルプス甲斐線(旧若草双葉線)の若草ランプ南交差点付近から、東の方を見上げると、釜無川の堤防の上にふたつの祠を見つかることができます。ここが、浅原の避水台。江戸時代に浅原地区の人々が水害から逃れるための避難場所が造られたといわれ、現在でも空から見るとこの部分だけ、堤防の幅が広がっていることがわかります。

この場所はまた、地域では「一本杉」とも呼ばれていて、かつては、ランドマークとなるような杉の木も生えていたようです。

堤防の上に避難するなんて、一見危険なようですが、ここは、浅原地区の北端。これより北は鏡中条地区、西は藤田地区になります。浅原地区の地形は、北から南に緩やかに傾斜していますから、地域の中で最も標高の高いこの場所が選ばれたのかもしれない。

浅原の歴史は、まさに釜無川に翻弄された歴史でした。地域に残された史料『浅原村引移一件』には、天正十四年(一五六六)以降、現在の場所に村を構えるまで、浅原村が、実に五回もの移転を余儀なくされ、寛永十九年(一六四二)から、現在の場所に落ち着く寛政三年(一七九二)までの間約一五〇年は、釜無川対岸の西花輪村地内に「仮住まい」していたことが記されています。

それ以降も、水害への憂いは消えることなく、このような浅原村の人々のために、当時の江戸幕府が設けたのが、浅原の避水台なのです。官営事業としてこのような避難場所が造られた例は、市域にはほかになく、浅原地区の水難の歴史が偲ばれます。

江戸時代に編さんされた『甲斐国志』には、「浅原村ハ古ヨリ水害多シ、寛政三年今ノ地ニ移居ス、河辺ノ孤村ナル故、洪水ヲ避ケシメン為メニ、享和二年(一八〇二)春勘定奉行小笠原和泉守、之レヲ築カシム」と記されています。避水台の建築を命じたとされるのは当時、甲斐も含めた幕府直轄の財政と民政のほか、河川工事なども取り仕切った勝手方の勘定奉行、小笠原和泉守長幸。幕府の旗本ですが、その先祖は、本市ゆかりの甲斐源氏、小笠原長清や加賀美遠光につながるといわれ、浅原との縁も感じます。

避水台では、今も、毎年八月二十五日に、浅原地区と隣の藤田地区との合同で水防祈願祭が行われています。文/写真 文化財課

※この頃、幕府の勘定奉行には、財政、民政を扱う勝手方と、訴訟関係を扱う公事方があった。

※現在の堤防上の木は、近年植えられたもの。